短　報

実践報告：フィジカルアセスメント講習会を通して、看護職キャリアアップコースの在り方を考える

田中　愛子*　丹　佳子*　井上真奈美*　川嶋　麻子*　張替　直美*　岡本早智子**

要約

本稿は、看護職キャリアアップコース試行事業の実践報告である。山口県内の看護教員19名を対象におこなったフィジカルアセスメント講習会を振り返り、プログラムの内容、参加者からの感想や評価を通して、今後のキャリアアップコースを開催する際の課題を論じた。

キーワード：看護職キャリアアップコース、フィジカルアセスメント、看護教員

1．はじめに

大学には、専門的広域生涯学習拠点としての役割を担うことが期待されている。生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策において」（1996年）の中にも、「大学等の公開講座については，職業技術の習得などの新たなニーズに即応するなど，内容の改善を図るとともに，期間についても数日や数週間など比較的短期間に集中したものも望まれる」[1]とあり、社会に開かれた大学の在り方が明示されている。本学においても、理念に「地域との共生」を掲げ、1999年７月から「地域共同研究センターを立ち上げ、2005年４月には、同センターを発展的に改組した「地域共生センター」が設置され、生涯学習を一つの部門とする活動が開始されることとなった。

その活動内容と方向を考察するための基礎的調査として、2004年に県民を対象に３つの調査が実施された。その中の一つに、看護職を対象としたキャリアアップ調査があった。看護職391名の調査を分析した結果、希望するキャリアアップ講座として、全体の約20%の看護職がフィジカルアセスメントを学びたいという回答であった[2]。

地域共生型リカレント教育システム研究委員会[注1]ではこの結果を受けて、立ち上げ可能なコースから順にコースの設立を行い、除々にコースを増やしていく方法で進めていくのが、最も有効なのではないかとの意見があった。

コース検討をしている際に、地域共生センターに「看護教員を対象としたフィジカルアセスメント講習会を開催して欲しい」との外部からの要請があった。そこで、このテーマを2005年度の看護職キャリアアップコース試行事業として行う運びとなった。

本稿は、この看護職キャリアアップコースの試行事業を振り返り、今後のキャリアアップコースへの課題を見い出すことを目的とした。

2．フィジカルアセスメント講習会の計画と実施

1)プログラムの作成

「看護教員を対象としたフィジカルアセスメント講習会」を試行事業として開催するにあたっては、はじめての事業であり、実行委員会組織を立ち上げ、委員会で運営方法を検討した。実行委員会のメンバーは、地域共生センター室長、研修会を要望した外部の教員、基礎的なフィジカルアセスメントの演習を担当する基礎看護学領域の教員と事務局で構成し、開催日時、内容、方法の細部に渡り、実行委員会で検討した。

対象が高等学校や専門学校の看護教員ということに注目し、系統的フィジカルアセスメントを単に紹介するだけでなく、講義・演習を通じて、「フィジカルアセスメント教育のあり方について考える機会とする」という目的を設定した。フィジカルアセスメント教育は、我が国においては1990年頃より注目されるようになった新しい分野である。どの教育機関でも、教育内

*山口県立大学看護学部、**山口県立大学附属地域共生センター

容や方法の検討が行われ試行錯誤を重ねているのが現状である[3)~6)]。今回の講習会の参加者も、おそらく同様の課題を抱えていると考え、このような目的とした。

内容は、外部の教員と話し合い、臨床実習におけるニーズの高い呼吸・循環器系のアセスメントを中心に、筋・骨格系、腹部、神経系のアセスメントを取り上げた。また、総論として「フィジカルアセスメントについて」「米国におけるフィジカルアセスメント教育」の２つを加え、図１のようなプログラムを作成した。

それぞれのセッションでは、講師による講義とデモンストレーションの後に、参加者が実際にフィジカルアセスメントを行えるような構成とした。また、セッションの合間には、休憩（コーヒーブレイク）を設け、講師と参加者、また、参加者同士で情報交換などができる場を設けた。さらに、すべてのセッション終了後は、フリーディスカッションの時間を設け、フィジカルアセスメント教育のあり方や、講習会の感想についてディスカッションをすることとした。

開始時間は、県内各地から参加する関係上、9時30分開始とし、16時頃には終了するよう工夫した。

図1　2日間のプログラム

〈第1日目〉平成17年8月26日（金）　山口県立大学　看護学部

時　間	内　　容	担当講師・会場
9:30～9:40（10分）	開　講　式	E412
9:40～11:10（90分）	『フィジカルアセスメントとは（基本的診療技術を含む）』 『米国におけるフィジカルアセスメント教育の実際』 このセッションでは、フィジカルアセスメントとは何かを一緒に考えながら、4つの基本的診療技術（視診・触診・打診・聴診）について学びます。また、我が国では1970年頃から注目されているフィジカルアセスメントですが、米国では1970年代にはすでに看護教育に取り入れています。教育の歴史が長い米国でのフィジカルアセスメント教育の一例を紹介しながら、我が国における教育方法や内容について考えるきっかけになればと思います。	E412 丹　佳子
11:10～11:20（10分）	休　　憩	E413
11:20～12:30（70分）	『筋・骨格系のアセスメント』 このセッションでは、フィジカルアセスメントの基本的原則として「頭から爪先まで（Head To Toe）」という考え方がありますが、筋・骨格系はまさに頭から爪先までを構成するものです。アセスメントの手法として、関節可動域測定や徒手筋力測定法（MMT）を用いながら、測定方法や並行して観察すべきポイントなどを中心に講義・演習を展開したいと思います。	E402 井上真奈美

〈第2日目〉平成17年8月27日（土）　山口県立大学　看護学部

時　間	内　　容	担当講師・会場
9:30～11:00（90分）	呼吸器系のアセスメント このセッションでは、呼吸器系の情報を得るための視診、触診、聴診の方法を学ぶとともに、その情報が意味していることを読み取り、判断する基礎知識を学びます。同時に、学生の習得技術として、何をどこまで教授するのかについて、共に考えて行きたいと思います。実際のイグザスを通してアセスメントしてみましょう。	E402 田中　愛子
11:00～11:10（10分）	休　　憩	E413
11:10～12:40（90分）	循環器系のアセスメント このセッションでは、循環器系と末梢血管のアセスメントの診査技術を学びます。聴診器から聴き取れる心音は何を意味しているのか、何を聴き取る必要があるのか等を演習として学びます。末梢血管のアセスメントでは、基本的な技術の再確認になるかとも思いますが、一緒に学び直してみましょう。	E402 田中　愛子
12:40～14:30（50分）	昼　食・休　憩	E413
13:30～14:30（60分）	腹部のアセスメント このセッションでは、腹部（主に消化機能）をアセスメントするための診査技術を学びます。フィジカルアセスメントで得られる消化機能の状態を表す情報は限られますが、腸蠕動音の聴取の仕方やその意味、腹痛を訴える患者さんへのアセスメントなど、学生が臨床実習でよく使用する技術やアセスメントを中心に知識や技術の再確認をしましょう。	E402 丹　佳子
14:30～14:40（10分）	休　　憩	E413
14:40～15:40（60分）	神経系のアセスメント このセッションでは、神経系のアセスメントの中でも、知覚（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）と認知機能をアセスメントするための診査技術を学びます。系統的な神経系のアセスメントでは、神経の種類ごとにアセスメントすることが多いのですが、今回は、患者さんの「認知・知覚」機能に焦点を当てたアセスメントを紹介します。	E402 丹　佳子
15:40～16:10（30分）	フリーディスカッション・アンケート記入・閉講式 2日間にわたる講座の内容についての質疑応答・皆様にお配りしたアンケート用紙への記入をしていただきます。	E413

2) 2日間の演習の展開

最初のセッションの「フィジカルアセスメントとは」「米国におけるフィジカルアセスメント教育の実際」では、講義形式としたが、その他のセッションはすべて、講義とデモンストレーションを組み合わせながら行った。さらに、単に技術を紹介するというよりも、「どう教えるか」という視点を盛り込んだ展開をこころがけた。そのため、市販のテキストは用いず、講師自作の資料をもとにそれぞれのセッションを展開した。

(1)「フィジカルアセスメントとは」「米国におけるフィジカルアセスメント教育の実際」

まずは、看護におけるフィジカルアセスメントの意義と4つの基本的診査技術について解説した。講義の中で、参加者に、高等学校や看護学校での教育の実際をたずねたところ、フィジカルアセスメントを授業科目として設定している学校はほとんどなく、限られた看護技術の時間に、何をどこまで教えるべきか、悩んでいる参加者が多かった。そのためか、このセッションの中で使用した教材に対して、多くの参加者が非常に興味をもっていた。

次に、1970年代頃より大学教育としてフィジカルアセスメント教育を行っている米国における教育の実際について写真などをまじえ紹介した。紹介したフィジカルアセスメント教育は、ミシガン州にあるWayne State University の看護学部で行われている授業の実際で、受講者は学生たちの練習時間や授業構成に対して深い関心を示していた。

(2)「筋・骨格系のアセスメント」

関節可動域測定や徒手筋力測定法（MMT）などの測定方法を中心に、観察ポイントなどについて講義とデモンストレーションを行い、その後に、参加者相互による演習を実施した。関節可動域測定時にわかりにくい基本軸や移動軸については、デモンストレーションだけでなく、ビデオを用いて解説した。また、単なる可動域測定ではなく、患者の日常生活動作を組み合わせた評価方法も紹介するなど、臨床実習に直接役立ちそうな内容を多く含めた。

(3)「呼吸器系のアセスメント」

呼吸器系のアセスメントのための視診、触診、打診、聴診の方法を紹介するとともに、その診査技術を通して得られる情報が意味すること、健康からの逸脱のアセスメントについて、講義とデモンストレーションを行った。

モデル人形ではなく、人をモデルにデモンストレーションを行い、よりわかりやすい工夫をこころがけた。また、異常な呼吸音は、実際の音をシミュレーターから流すなど、目的によって、モデルを使い分けた。診査技術の中では打診の技術が、参加者にとって難しかったようで、講師が個別に指導を行うなど、デモンストレーションではカバーしきれない指導を行った。

(4)「循環器系のアセスメント」

循環器系と末梢血管系のアセスメントの診査技術を紹介した。特に心音については、聴診器から聞き取れる音が何を意味しているのかについて、丁寧に解説した。

呼吸器系のアセスメントに引き続き、診査の概要は人をモデルに行い、異常心音などはシミュレーションを用いるなど、目的に応じて使い分けた。看護基礎教育で教える技術としては、異常の種類の判別ではなく、正常と正常からの逸脱がわかることに主眼をおいた内容の指導が大切であることを強調した。

(5)「腹部のアセスメント」

腹部にはさまざまな臓器があるが、その中でも消化機能のアセスメントを中心に講義とデモンストレーションを行った。

消化機能のアセスメントは臨床実習の中でも、使用頻度が高いアセスメントである。消化機能ということで、口腔内のアセスメントも含め、腹部の視診・聴診・打診・触診を紹介した。腹部の腸蠕動音の異常音は、ビデオなどを用いて確認したが、参加者の中には臨床で、異常音聴取の経験を有する教員がおり、異常音が出現する疾病や、その音の特徴などについて、現場の話をまじえながら、相互に理解を深めた。

(6)「神経系のアセスメント」

神経系のアセスメントの中で、「認知・知覚」に焦点をあてて、アセスメントの実際を紹介した。

視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚などのアセスメントは、さまざまなアセスメント道具の使い方なども交えながらデモンストレーションをすすめていった。認知機能については、資料は配付したものの、時間がなく十分に説明する時間が持てなか

った。

3．講習会実施後の評価

講習の評価については、実施後のフリーディスカッションにおける感想とアンケート調査を用いておこなった。

1）実施後の感想

感想を要約すると、以下の3点に集約される。①今回の研修会に参加し、実際に演習を通して診査技術を確認できた。②診査技術の習得については不明確な部分もあるので、各グループにチューターの教員がいて、細部まで確認して欲しかった。③フィジカルアセスメントの教育方法として、教材の提示の仕方、資料の工夫などが学習できた、といったものであった。

2）アンケート結果から

受講生１９名を対象として、講習会についての意見を聞いた。

２日間の講習会が有意義だったと回答した人は89%（17人）、まあまあ有意義だったとした人は11%（2人）、どちらかというと有意義ではないと答えた人はいなかった。各コースの評価は図２に示した。概ね良好な評価を得た。

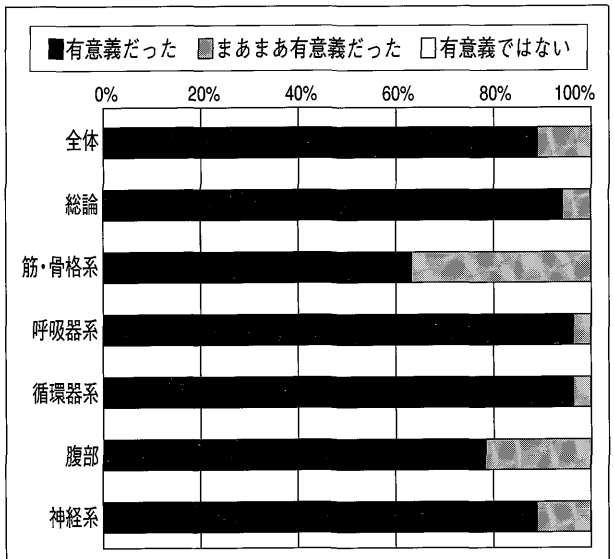

図2　各セッションの評価

4．今後の課題

「看護教員を対象としたフィジカルアセスメント講習会」試行事業を通して、今後の課題として以下の４点が明らかになった。

1）問題の共有と双方向型の情報の流れをつくる

今回の講習会の対象は、ほとんどが教員であった。各学校の教育課程は異なっていても、学生の教育にあたっての課題は共通するものがあった。例えば、何をどの程度まで学ばせるのか、より効果的な教授方法はないのか、といった問題意識の共通性である。今回、これらについて、講習生の教員同士、講習生と本学教員がともに語り合う機会があり、筆者らは多くの学びを得た。このように、相互に学び合える講習会が効果的と思われる。

2）学部内の人材の活用とＴＡ（ティーチング・アシスタント）の導入

今回は３人の本学部教員が、９ベッドから１０ベッドの指導にあたった。複数のベッドを掛け持ちで担当するには、若干の限界もあった。例えば横隔膜の移動を確認する打診の技術については、打診の技術、音の変化の聞き分け、一連の技術の流れを確認するためには時間が必要となる。そのために、今後は人数に応じてＴＡを加える必要が示唆された。また、今回は基礎的なフィジカルアセスメント技術であったが、今後アドバンスドコースなどの要望がある際には、テーマに応じて広く学部内の人材を検討する必要があると思われる。

3）大学教員としての研鑽

前項でも述べたように、今回は基礎的な技術の確認の講習会であった。しかし、各系統別に特化したフィジカルアセスメント技術を求められた際に、筆者らに対応ができるであろうかと疑問が残った。また、今後ますます看護学生の看護実践能力が求められること[7) 8)]に伴い、教員が看護技術に未熟であることは問題と思われる。教員自身の看護実践能力を向上させるとともに、看護技術を教授する教育方法においても、さらなる探求を続ける必要があることを痛感した。

4）講習会の継続

今回の試行事業に関して、参加者から好意的な評価を得るとともに、さらに今後も定期的に継続して欲しいとの要望があった。フィジカルアセスメントの領域は広く、その診査技術の方法は多岐に渡る。可能で有れば、継続して講習会を行い、看護教育に当たる教員同士が共に成長できることを願うものである。

以上を、今後のキャリアアップコースの開講への課題として、ここに提案する次第である。

謝辞

今回の試行事業の機会を与えてくださった、中村女子高等学校衛生看護専攻科の棟久房枝先生をはじめ、講習会に参加していただき、私たちに多くの学びの機会を与えてくださった参加者の皆様に深く感謝申し上げます。同時にきめ細やかなご配慮いただいた事務局の船崎様、大田様、久村様のご尽力に重ねてお礼を申し上げます。

本事業は、平成１７年度山口県立大学創作研究活動助成金を受けた。

注１）地域共生型リカレント教育システム研究委員会：山口県立大学の地域貢献の在り方に関する調査や検討を行う委員会。メンバー構成については山口県立大学の地域貢献の在り方に関する調査報告書の2ページをご参照いただきたい。

文献

１）生涯学習審議会：「地域における生涯学習機会の充実方策について」（答申）、1996.

２）山口県立大学附属地域共同研究センター：山口県立大学の地域貢献の在り方に関する調査報告書—生涯学習・リカレント教育を中心に、25-36、2005.

３）太田勝正, 加藤あさか, 八尋道子, 真弓尚也：わが国のフィジカルアセスメント教育の実態　平成11年度全国調査の結果より、看護教育、41(12)、1060-1065、2000.

４）山内豊明：フィジカルアセスメント　その意義と具体的な教育展開の試み、看護教育、40 (11)、898-907、1999.

５）高島尚美：フィジカルアセスメント　学生とともにつくるフィジカルアセスメントの授業、看護教育、40(11)、916-924、1999.

６）外山絹子：フィジカル・アセスメント　基礎教育での取り組み　専門学校での実践、看護教育、40(11)、925-931、1999.

７）看護教育の在り方に関する検討会：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて、東京、文部科学省高等教育局医学教育課、2002.

８）看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書、東京、厚生労働省医政局看護課、2003.

Title : An approach to the training program for nurse's career development:The analysis of physical examination workshop

Author : Aiko Tanaka*, Yoshiko Tan*, Manami Inoue*, Asako Kawashima*,Naomi Harikae*, Sachiko Okamoto**

*School of Nursing, Yamaguchi Prefectural University
**Centre for Cooperative Community Development, Yamaguchi Prefectural University

Key words : the training program for nurse's career development, physical assessment, nursing teacher

---